

秦漢の離宮址

－漢甘泉宮址を中心とした踏査－

橋本 義則（山口大学人文学部）

山口大学人文学部の「科学研究費の間接経費に関わる研究プロジェクト経費」を得、2008年11月8日から16日にかけて中華人民共和国陝西省の西安・咸陽両市を訪れ、漢長安城とそれに関連する離宮址の踏査を行った。踏査では、主に地表に残る遺構の確認、特に建物の台基と城壁の痕跡をたどるとともに、遺構の現状写真を撮影することに主眼をおいた。今回踏査した遺址のうち、漢長安城については昨年度分も含め、別に村田裕一氏による簡潔な報告があるのでそれに譲り、ここでは、甘泉宮址を中心に秦漢の離宮址（漢の離宮跡の殆どは秦に起源）の現状を報告する。ただ発掘調査が殆ど行われていないため、甘泉宮址以外は版築による構築物の存在を確認したに止まる。

なお、踏査の全行程において、中国社会科学院考古研究所西安研究室の漢長安城考古隊の全面的な協力を得た。考古隊の劉振東・張建峯両氏には感謝の言葉もない。また、甘泉宮址と望夷宮址・楊趙村宮殿遺址では、咸陽市の涇陽・淳化両県の文物旅游局の方に現地案内をいただいたが、特に淳化県博物館の王謙館長には、甘泉宮址の遺構の存在確認を現地で行う際に詳細で丁寧な説明をいただいた。

（1）上林苑の離宮址（鼎湖延寿宮・望夷宮と楊趙村宮殿遺址）

漢長安城は、渭水を挟んで秦咸陽宮と南北に位置する秦の宮殿を受け継いだもので、現在の西安市が唐長安城以来の地にあるために歴代の市街と重なることなく、遺址として良好に保存されてきた。秦漢代にはその周囲に上林苑と呼ばれる、北は渭水の北はるか黄山に至り、南は終南山に及ぶ広大な禁苑が広がっていた。文献史料によれば、上林苑は「苑垣」で囲って庶民を排除し、その広大な苑内には離宮や苑池が点々と営まれていた。これらの離宮や苑池で今日地上に跡をとどめるものは多くないが、建章宮・太液池や昆明池など、遺址が明らかなものもある。ただそれらを囲む「苑垣」はまだ発見されるに至っていない。

①15日、西安市街から東南へ35キロほど離れた同市藍田県焦岱鎮焦岱村に行き、上林苑にあった離宮の一つで、その東限に位置すると考えられている鼎湖延寿宮址の所在を確認した。かつて煉瓦工場の建設工事に伴って「鼎湖延寿宮」「千秋万歳」などの銘文をもつ瓦当が発見され、1989年には発掘調査も行われて建物や墻垣の版築などが発見された。遺構の保護のために工場の建設は煙突のみで止められ、現在それが遺跡の目印となっている。遺跡は、低い山が周囲を繞り、東南から西北へ

流れる二本の川に囲まれた小高い丘の上にある。現状は畠地で、その規模は約3万平米と言われるが、踏査によって確認した遺物の散布状況や周辺住民からの聞き取りの限りではさらに広く、煙突のある丘よりも一段高い東南方にある丘の上にも広がると思われる。なお、発掘調査の詳細は未報告のままであるが、出土遺物の一部は現在、西安市博物院に展示されている。

②12日、漢長安城の北を西から東へ流れる渭水のはるか北方に位置する甘泉宮址に向かう途中、咸陽市涇陽県で秦漢の離宮址二箇所を踏査した。ひとつは西安市街からほぼ北へ約25km、同県蔣劉郷徐家堡村にある望夷宮址、今ひとつは西安から北北東へ約55km白王郷富村・楊趙村にある楊趙村宮殿遺址である。望夷宮は秦の上林苑に営まれた離宮で、二世皇帝胡亥はここで最期を遂げたとされている。その遺跡は涇河南岸の高い段丘上に版築をもって造営されているが、すでにその北部は涇河によって大きく破壊されてしまった。また、楊趙村宮殿遺址（漢の舎車宮に比定）は、峪河南岸のなだらかな丘陵上に位置し、現在は果樹や野菜を栽培する畠が広がる。いずれも発掘調査は行われていないが、大型建物の版築基壇の存在、版築層の広がりの確認、そして瓦当などの大量の遺物の採集がなされ、現地でも厚い版築の広がりと同該時期の遺物の散布状況を確認できた。いずれにも陝西省による遺址保護のための文物標誌が立てられているが、近くにある煉瓦工場の土採りによって版築は大きく削られてしまい、現在なお破壊は継続している。

（2）甘泉宮址（図1及び写真1～12参照）

13日、西安市街から北北西に90km、咸陽市淳化県鉄王郷涼武帝村を中心に広がる甘泉宮址を訪れ、建築台基と城壁の残存部分を踏査した。漢の甘泉宮は、文献史料によれば、秦の離宮林光宮を継いだと言われ、その周囲には甘泉苑と呼ばれる禁苑が拡がり、上林苑と同様に「苑垣」で囲われ、内部には離宮・苑池が点々とあったらしい。宮址は、四周を版築の城壁が繞る東西1.8km、南北1kmほどの規模で、比高差50mほどで北から南に下る傾斜地にある。東西と西北入隅部の北には深い谷をもつ溝があり、それが宮址の三方を限る。中央やや西寄りにも城頭前溝と呼ばれる溝があり、それによって宮址は東西に分けられている。宮址の東北部にはひときわ高く遺る第1号（祭天のための施設「通天台」に比定）と第2号の二基の建築址があり、その間には遺跡の管理事務所が設けられている。第2号建築址から第3・4号両建築址の下層には版築が広がり、現状でやや小高くなっているこの一帯を造成するための地業であったかと思われる。また、王館長の話では、これまで宮外とされていた第8号建築址から西に版築が延びているという。もしそうであるなら、第8号建築址は東北角楼で、北と東の城壁はこれまでの推定地より外にあることになり、宮の規模もやや大きくなる。現在、地上に残る城壁は、西北入隅部の北城壁と西城壁、および南城壁の一部（城前頭村が南城壁にかかることもあって、家屋などで寸断され、断続的に遺る）だけである。以前の報告では西北・西南両角楼とその間に位置する西門は比較的よく遺っているとのことであったが、現状では西北角楼はそれと分かるものの、西門は顕著な遺構として確認できず、特に西南角楼はレンガ製造のためかと思われる土採りのために大きく破壊されている。皮肉にもそのためにかえて西城壁と角楼を構築するための版築と角楼の近くに設けられた排水のための塼積の溝を、よく断面観察することができた。ただ遺址破壊の問題はこれに止まらず、現在整備中である宮跡東北部と「秦直道」跡の起点とされる地点で、発掘調査が行われないまま整備が進められているため、整備工事で破壊されている部分

も見受けられた。

【参考資料・参考文献】

『中国歴史大辞典』秦漢卷、上海辞書出版社、1990年

『漢代長安詞典』陝西人民出版社、1993年

『中国文物地図集』陝西分冊上・下、西安地図出版社、1998年

『中国都城辞典』江西教育出版社、1999年

何清谷『三輔黄圖校釋』中華書局、2005年

尹申平『涇陽秦都咸陽望夷宮遺址』『中国考古学年鑑1985』文物出版社、1985年

『涇陽五福村秦望夷宮遺址』『中国考古学年鑑1990』文物出版社、1990年

姚生民『漢甘泉宮遺址勘查記』『考古』1980年2期

姚生民編著『甘泉宮志』三秦出版社、2003年

【追記】

帰国後、甘泉宮址についてこれまでとは異なる角度から検討を加えた、榆林市榆陽区古道研究室等著『秦帝国全天皇台遺址及其源流考』考証分冊・星図分冊（中国科学技術出版社、2008年）を入手した。同書は、榆林市を中心に陝北（陝西省北部）から内蒙古自治区・山西省にかけ、約28000平方キロに亘って分布する円形あるいは楕円形の1424基に及ぶ「土台」が、統一秦の造営した「全天星台」の遺址であり、それらによって全天にある332の星宿・星官を一つ一つ地上に表現し、「地上天国」としたことを明らかにした。

さらに、同書では源流に遡って春秋戦国期の簡略化された星台遺址に検討を加えるとともに、秦をついだ漢においても呂後の臨朝称制時に「全天星台」が造られ、それが甘泉宮址とその東南辺に点在する台基として残っているとした。ただそれは統一秦以前のものと同様に簡略化されており、二十八宿中の五宿と六つの星官のみを表現するに止まっている。甘泉宮址に関わる部分に限定して略記すると、「通天台」の遺址とされる台基は「太子星台」、その西に位置する台基「望母台」が「帝星台」、それから西南に延びる位置にある二つの台基は順に「庶子星台」と「後宮星台」で、これらによって北極を表し、これらを囲む甘泉宮の牆が紫微垣に当たると推定している。これらのうち「帝星台」は祭祠あるいは観星の処であり、傍らに「祭石」が置かれた「主星台」であったとして、そこには階段が設けられ、頂部の真ん中に木柱のようなものを建てて天に通ずる意味を表していたのではないかと推測している。ただし、私たちの踏査ではそのようなものを確認することはできなかった。北極の四星台は秦によって造られ、かつてその南にあったと言われる回廊址や門枢石は漢ではなく秦によって造られた前殿に関わるもので、漢の前殿はその回廊の西、「後宮星台」に宛てられている台基の南にあったとも推測している。詳細は同書を参照されたいが、なおその当否については即断せず、今後内外において加えられる検証の結果を待ちたい。

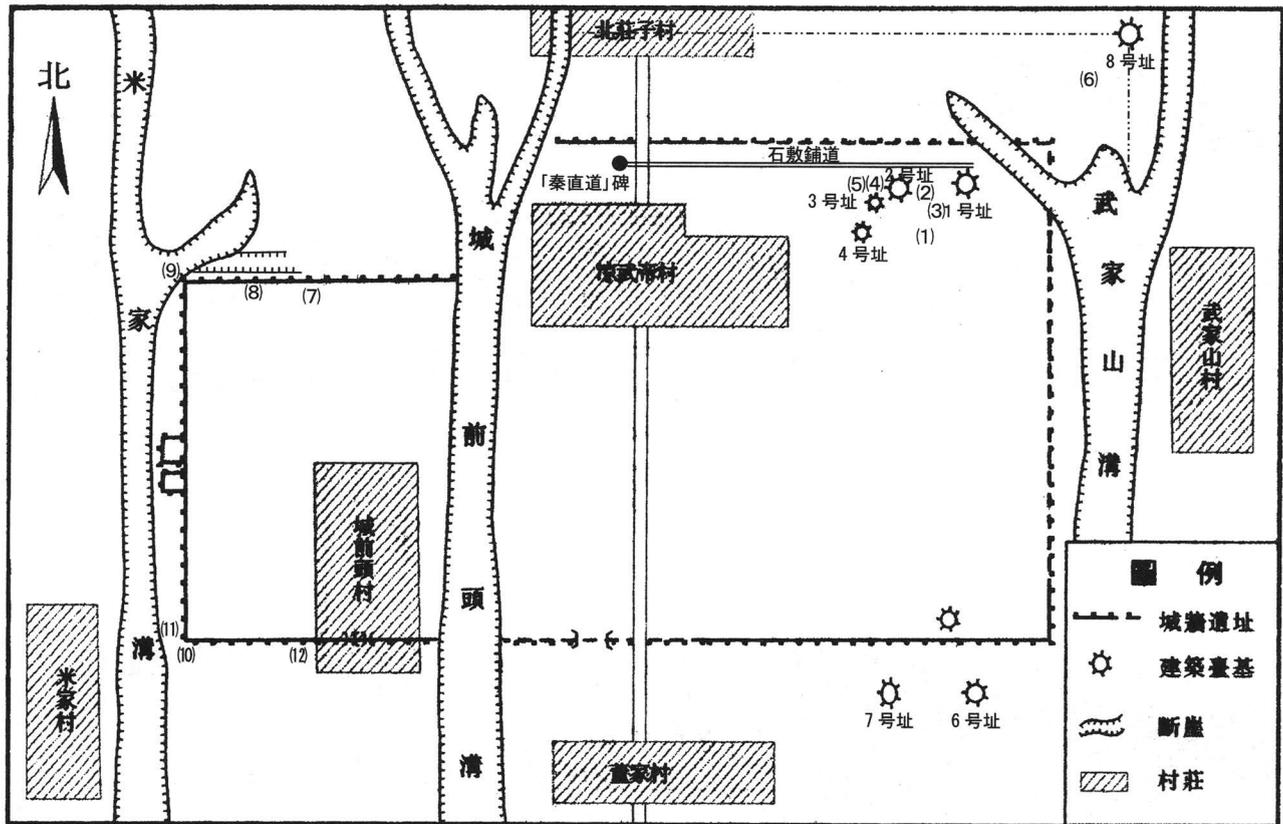


図1 甘泉宮址踏査記録図 (原図:『淳化縣文物志』所収) (1) — (12) の数字は写真の番号と対応……は版築が存在するとの情報を得た部分



写真1 甘泉宮址 (東北部、南から、右が1号建築址、左が2号建築址)



写真2 甘泉宮址の礎石 (甘泉宮址文物保護所前)



写真3 1号建築址 (通天台址、西南から、中央の人物は村田裕一氏)



写真4 3・4号建築址 (2号建築址上より西南を望む、手前が3号建築址、後方が4号建築址、右手に白く見える石敷舗装道路の先に「秦直道碑」が立っている。)



写真5 3号建築址北面崩落箇所版築（北から、後方は4号建築址）



写真6 8号建築址（西北角楼か、西南から、奥に見えるのが甘泉山の山並）



写真7 北城壁址（西北入隅部、東南から）



写真8 北城壁址と平行する谷、西北角楼・西城壁址（東から）



写真9 西北角楼址と西城壁址（北北西から）



写真10 西南角楼址（南から、右手の人物は劉振東氏）



写真11 西城壁版築中の排水施設址（西から、物差を当てている人物は村田裕一氏）



写真12 南城壁断面（東から）